

ヨハネによる福音書10章 「良い牧者」

1A 羊飼いと羊 1-21

1B 牧者と盗人 1-6

2B 羊たちの門 7-10

3B 良い牧者 11-18

4B 分裂 19-21

2A 父と一つである方 22-42

1B 永遠に守られる方 22-30

2B 良いわざ 31-39

3B ヨハネ以上の方 40-42

本文

ヨハネによる福音書10章を開いてください。私たちは、前回、生まれつきの盲人をイエス様が癒されて、ユダヤ人指導者によって審問を受け、ついに会堂から追い出されましたが、その時にイエスに会い、この方を神の子キリストとして受け入れ、礼拝したところを読みました。そこにはパリサイ人たちも居合わせていました。

1A 羊飼いと羊 1-21

そこでイエス様は、羊飼いと羊の喩えをもって何が起きているのかを説明していかれます。ご自身が羊飼いで、そしてユダヤ人の宗教指導者は盗人であり、また羊飼いで雇われなのだということを語られます。実はイスラエルは、ずっとその指導者と民の関係を羊飼いと羊との関係で喩えられていました。ダビデが王であったことを詩篇の著者が歌いました。「78:70-11 主はしもベダビデを選び羊の囲いから召し出された。乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て御民ヤコブをご自分のゆずりの民イスラエルを牧するようにされた。彼は全き心で彼らを牧し英知の手で彼らを導いた。」ところが、このダビデの模範に倣わずに、自分たちのことだけを考えている指導者に対して、主は預言者エゼキエルを通して叱責しました。34章に書かれていますが、羊を養うべきところをかえて屠り、傷があるのに介抱せず、失われた者を捜さず、かえって羊たちを力づくで支配したと咎めています。そのために、牧者不在となり、羊たちは散らされて、野の獣のえじきとなります。それが、過去に二回、ユダヤ人に起こりました。一つは、バビロン捕囚です。そしてもう一つ、ローマのエルサレム破壊による、ユダヤ人の世界離散です。

そこで主は、大胆なことを語られます。34章11節です、「まことに、【神】である主はこう言われる。「見よ。わたしは自分でわたしの羊の群れを捜し求め、これを捜し出す。」そう、主ご自身が羊飼いとなると言われ、イスラエルの迷った羊たちを捜しだすと言われます。これが、イエス様がヨハ

ネ 10 章全体でお語りになっている背景です。ご自身がまさに、ここでエゼキエルが預言している主ご自身なのだ、ということです。

1B 牧者と盗人 1-6

1 「まことに、まことに、あなたがたに言います。羊たちの囲いに、門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者は、盗人であり強盗です。2 しかし、門から入るのは羊たちの牧者です。3 門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。4 羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。5 しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」6 イエスはこの比喩を彼らに話されたが、彼らは、イエスが話されたことが何のことなのか、分からなかった。

これは、ありふれた光景でした。「羊たちの囲い」は、主に冬の夜に羊を集めておく場所です。石垣で囲まれ、茨やアザミが生えていて、そこを乗り越えることのないようにされています。今、仮庵の祭りも終わり冬に差しかかっているので、イエス様がこれを語られた時に、ますますよく見る光景になっていました。そして、この囲いには門番がいて、夜の番をします。この囲いには、いくつもの羊の群れがいます。一人の羊飼いの群れではなく、複数の羊飼いの群れが、いるのです。羊飼いは家に戻り、寝て、夜が明けたら、自分の群れを連れ出します。そこで、すごいことがあるのです。午前礼拝でお話しましたが、羊は自分の羊飼いの声を知っているのです。いろいろな羊飼いが声をかけても、自分の羊飼いの声だけに反応して、ついていきます。このことをイエス様はここで語っておられるのです。

ですから、イエス様が主であり、まことの羊飼いであり、その声を聞いて、10 章に出てきた生まれつきの盲人のように主に聞き従う者たちがいるのだということ。「彼の声を知っている」とあるように、いろいろな雑音があっても、それでもイエスの声だけは分かり、ついていっているのだということです。盗人や強盗がいて、それがここではユダヤ人の宗教指導者なのですが、彼らが奪い取ろうとしても、それでも一人一人は、羊囲いにいる羊のように、神によって守られているということです。私たちが一人一人、主ご自身の声を聞き分けることができるように、神は願っておられます。そのためには、主ご自身をどれだけ知っているか、信頼しているか、どれだけ、自分のことに気をかけてくださっているかを知ることです。主がどれだけ自分のことを気にかけておられるかを知らなければ、見事に、これこれをしなければいけないのだ、とする偽教師の声のほうが、その音が大きくなってしまいます。

2B 羊たちの門 7-10

7 そこで、再びイエスは言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしは羊たちの門です。8 わたしの前に来た者たちはみな、盗人であり強盗です。羊たちは彼らの言うことを聞

きませんでした。9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかになりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。

彼らは比喩が分からなかったので、イエス様は少し、場面を変えて語られました。ここで主は、「わたしは羊たちの門です」と言われています。先ほどは羊飼いに自身を喩えられましたが、ここでは羊の門だということです。これは、実はご自身を未だ羊飼いとしてお語りになっています。というのは、また別の羊の囲いについて話しておられるからです。町にある囲いではなく、野原や荒野においてであります。そこに、羊の囲いがあります。夏の夜であれば、わざわざ町まで連れ帰るのではなく、その囲いに入れます。それは岩でできたもので、門はなく入り口があるだけです。夜が近づくと、羊飼いはこの囲いに連れて来て、杖を横にして低く持ち、一匹一匹、その下をくぐらせて、入念にチェックをして、茨が付いていれば取ってあげて、傷があれば油を塗ります。そして、数を数えます。すべての羊が連れてこられたら、羊飼自身が入り口に横たわるのです。ここが大きな違いです。ですから、ご自身を門と言っていますが、未だ羊飼いとしてお語りになっています。

ここでイエス様は、門であるご自身と、盗人と強盗との違いをはっきりさせています。盗人や強盗は、盗み、殺し、滅ぼすことが目的ですが、主は、いのちを与え、それを豊かに与えるために来られました。霊の戦いというのは、絶えずこのようになっています。「詩 100:3 知れ、主こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊。」主は、ご自分の羊を持っておられます。けれども、盗む、殺す、滅ぼすことをしようとする輩がいます。午前礼拝で話したように、それは、神の恵み、キリストにあって愛してくださったことを話すのではなく、重荷を負わせ、自分で何とかしなければいけないと焦らせるものです。宗教という形でやってきます。しかし、その煽りを受けずに、しっかりと主の優しさと力強さの中に留まっていることが重要です。

3B 良い牧者 11-18

11 わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。12 牧者でない雇人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見ると、置き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。13 彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけていないからです。14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。15 ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです。また、わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます。

なぜ羊が羊飼いの声を聞き分けることができるのか？それは、羊飼いがどれだけ羊のことを心にかけているか？にかかっています。羊は、良い牧者のところにいれば、それだけ深い信頼を寄せていて、その声を聞き分けることができます。そこでイエス様は、ご自分は命を捨てるまでに心にかけていることを話しています。なぜなら、イエス様にとって、その羊の群れはご自分のものに

なっているからです。雇われている羊飼いとの違いを語っておられます。雇われている人は基本、自分の報酬のために行っていますね。いざとなったら自分の命のために逃げます。しかし自分の所有であれば、命をかけます。覚えているのは、東日本大震災の時に宣教師では速やかに帰国した人々と、それでも残っていた人々に分かれました。原発事故の影響が収まった後に戻っていても、その宣教師の言うことをどれだけ聞くか？という大きく変わってきますね。

そして、自分の所有であるだけでなく、その羊を良く知っているのです。父なる神をイエス様が知っているように、また父が自分を知っているように、牧者と羊の間にも知っているという関係があるということです。ですから、私たちが偽りの教えやそういった教えの風に吹きまわされないようにするのは、何とんでも、どれほど自分がイエス様に知られて、また自分が知っているかにかかっています。自分が何かをするということよりも、この関係を持っていることこそが自分が守られ、救われる道となっているのです。

16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです。

囲いに属さない他の羊とは、私たち異邦人です。先ほどまで、イエスは、ご自分を信じるユダヤ人について語っておられました。なぜなら、イエスはイスラエルの失われた羊を見つけるために来られたのであり、イスラエルの救いのために来られたからです。けれども、ユダヤ人がイエスをキリストとして受け入れなかったため、救いが異邦人にも及ぶようになりました。ヨハネは、これからも何度となく、主の選びはイスラエル人を越えて異邦人に及ぶことを言及していきます。「一つの群れ、一人の牧者」というのは、ユダヤ人にとっても、異邦人にとっても、牧者は一人イエス・キリストであり、キリストにあって一つの群れになっているということです。二つのものが一つにされた、キリストの体、教会のことを話しておられます。

17 わたしが再びいのちを得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。18 だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。」

主がいのちを捨てられるのは、それを再び得るため、つまり十字架に付けられて、それから甦るためなんだということです。父なる神は、御子を死の中に置かれたままにすることを願われず、その後甦らせるからこそ、その死が意味あるものとなります。イエス様は、それを「ご自分の前に置かれた喜び」とされました。「ヘブ 12:2 この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」この喜びは、ご自身が死ぬ

でも、甦り、父なる神のみもとに戻るといふ喜びです。

そして、「わたしが自分からいのちを捨てるのです」と言われます。十字架につけられるイエスは、一見無力に見えますが、実は十字架から逃れようと思えば、いくらでもできたのです。むしろ、この十字架の場面を作り出す方が、イエスにとって多くの労力を費やされたのです。イエスは、捕らえられるときに、弟子たちにこう言われました。「マタ 26:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。」一軍団は六千人ですから、十二軍団で七万二千人です。一人の御使いで、大地震が起こるぐらいですから、捕まえに来た群衆など一ころです。でも、イエスはあえて、ご自分のいのちを捨てられました。十字架で死なれるとき、「父よ。わたしの霊をあなたの手ゆだねます。(ルカ 23:46)」と言われて息を引き取られました。また、ローマの兵士たちが囚人の足を折って、息の根を上げようとしたが、イエスは既に死んでおりました。人からいのちを取られたのではなく、ご自分でいのちをお捨てになったのです。

そして、「再び得る権威があります」と言われます。十字架のときには、神の偉大な力が人の目に見えるかたちでは、大きく現われませんでした。太陽が真っ暗になったり、神殿が真二つに裂けたりしましたが、十字架においては、イエスは無力であったと受けとめる人たちもいるでしょう。しかし、イエスはいのちを捨てたときと同じ力を、復活において用いられます。この復活において、イエスが神の御子であることが、誰の目にも分かるようにされたのです。パウロは、「ロマ 1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」と言いました。

4B 分裂 19-21

19 これらのことばのために、ユダヤ人たちの間に再び分裂が生じた。20 彼らのうちの多くの人が言った。「彼は悪霊につかれておかしくなっている。どうしてあなたがたは、彼の言うことを聞くのか。」21 ほかの者たちは言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。見えない人の目を開けることを、悪霊ができるというのか。」

再び分裂が起こりました。仮庵の祭りの大いなる日に、生ける水の川があなたの腹から流れ出ると宣言された時に分裂が起こりました。そして生まれつきの盲人が目が見えるようになっても分裂が起こり、今、ここで再び分裂が起こっています。確かにイエスが人間であれば、このことばは気が変になった人の言葉です。イエスの言葉は、単に道徳的であるとか、哲学的であるとか以上のものです。あまりにも過激でした。けれども、イエスがキリストであるかもしれないと信じたユダヤ人たちは、盲人の目をあけられたイエスを見ています。目をあけたそのわざによって、イエスがキリストではないかと考えています。そう、そのわざを見れば、そのしるしは、否定しようもなく、この方がキリストであることを示しているのです。ですから、疑いかかってくるユダヤ人に対して、

イエス様は次に、わたしのわざを信じなさいと教えていかれます。

2A 父と一つである方 22-42

1B 永遠に守られる方 22-30

22 そのころ、エルサレムで宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。23 イエスは宮の中で、ソロモンの回廊を歩いておられた。

宮きよめの祭りは、ちょうどクリスマスと同じ 12 月 25 日頃に行なわれ、ハヌカーとも呼ばれます。時は冬なので冬とヨハネは言っていますが、おそらく、ここで他の箇所と同じように、霊的にも冬、ユダヤ人が自分を信じないということを暗示しているのでしょう。

共同訳では「神殿奉獻式」と訳されています。これは、他の祭りと違って聖書には記録されていないのですが、ダニエル書 8 章に預言され、外典のマカバイ記に記されています。当時ギリシア帝国によって支配されていたユダヤ人は、その王の一人であるアンティオコス・エピファネスによって迫害を受けていました。彼は宗教的な迫害をしました。つまり、神殿に豚をささげさせるなどして、神殿を汚したのです。あるとき、マカバイ家の息子の一人ユダが立ち上がって、ギリシアに戦いを挑んだのです。武器はあまりにも貧弱でしたが、神がついており、戦いに勝利することができました。そして、宮をきよめたのです。その時に、神殿のための燭台に、聖別された油を整合するのに時間がかかりました。それにも関わらず、燭台の灯が八日間、燃え続けました。それを記念して、ハヌカーは左右4つずつの枝と、真ん中に一本の枝のある燭台で、火を灯します。ハヌカーは、「光の祭り」とも呼ばれます。ですから、イエス様が「世の光です」とご自身のことを言われたのは、ハヌカーにもかかわりがあったのかもしれませんが。

イエスはこれに出席され、ソロモンの廊を歩いておられました。神殿の東側にある廊のあるところですが、ここでラビなどが教えを垂れます。ですから、イエス様は誰でも見つけることのできる、目立った場所におられました。

24 ユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと教えてください。」25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証しているのに、26a あなたがたは信じません。」

まるで刑事らが犯人を取り囲むようにして、ユダヤ人たちがイエスを取り囲みました。おまえがキリストなら、そうはっきりと言え、と言っています。しかし、「わたしは話した」と言われます。主が語られた内容からして、この方はキリストであるとわかるように語っておられます。前に目の開けられた盲人が、どのように目を開けたのか話しているのに、ユダヤ人はもう一度、問い詰めたのに

似ています。聞いているのに信じていないだけです。

そしてとても大切なことを、語られます。「わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証している」ということです。語られていること以上に、誰も反論できないような証拠を見せておられました。わざが、この方が父から来られた方であることが分かるのです。けれどもなぜ、彼らが信じないのかを、イエス様は語られます。

26b あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。27 わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。

先の羊飼いと羊の話に戻しておられます。どんなに説得したところで、それでも信じていないのは、彼らが心を頑なにしているからなのですが、イエス様はその選を父なる神にお任せになっておられます。「わたしの羊の群れに属していないから」と言われています。けれども、イエス様の羊であるならば、第一に、声を聞き分けます。第二に、イエス様がその人たちを知っておられます。第三に、彼らがイエス様に付いてきます。どうか、羊としての自信を持ってください！もうすでに、主はあなたを導き、声をかけておられて、すでに従っているのです。それに気づいてください。すべてのことは、神の御手の中で動いているのです。

28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません。29 わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。30 わたしと父とは一つです。

イエス様は、永遠のいのちにある強い結びつきについて語られています。罪によって死に、滅びることは、決してなく、その救いは一時的なものではなく、永遠なのです。途中で、「一度救ったけれども、ああやめとこ！」とか言って、見捨てないのです。そして、強盗のような者、盗人のような者が来たとしても、誰もイエス様から奪い取られることはありません。「ロマ 8:38-39 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

人が救われることにおいて、イエス様がどのように見ておられるかが、ここに書かれています。父なる神がご自身にくださった者たちということです。なので、とても大切にします。羊飼いが羊を大切にするように大切にしてください。そして、イエス様に与えられた者たちは父の手にもあります。ご自身と父は一つだからです。

2B 良いわざ 31-39

31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒瀆のためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」

イエスは再び、ご自分のわざについて言及されています。ご自分のわざは良いわざが、とおっしゃっています。目を開けたりするわざは、だれが見ても良い知らせです。なぜ、この良いことのために、石打ちにされなければならないのか、と聞かれています。主にある良いわざも、同じような迫害を受けることがあります。どうして、この方にあるわざが、憎しみをかうことになるのか？

それは、このユダヤ人の言っていることに通じることでしょう。「冒瀆のためだ」ユダヤ人にとって、神は唯一であり、他に神々があってはなりません。人間を神と一つにすることなど、言語道断、いや冒瀆そのものです。律法には、冒瀆は石打の刑です(レビ 24:16)。同じように、イエス様を信じるといふことで、とてつもない抵抗を覚え、拒否する人々は、自分の中に自分より上の神を受け入れないといけない、この方に自分がひれ伏さないといけないことを知っているからです。

34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った。「おまえたちは神々だ』』と書かれていないでしょうか。35 神のことばを受けた人々を神々と呼んだのなら、聖書が廃棄されることはあり得ないのだから、36 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が聖なる者とし、世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。

律法の中で、裁き人が「神々(エロヒム)」と呼ばれているところがあります。出エジプト記 21 章 6 節に、奴隷が主人に生涯、仕えたと明言したならば、「その主人は彼を神のもとに連れていく。」と語っています。この「神(エロヒム)」は「裁き人」とも訳すことのできるもので、神のことばを受けた人のことを話しています。神が唯一の方ですが、その方のことばによって人の運命を定めるにあたって、神の代理人の役割を果たしているからです。そして、ここは詩篇 82 篇 6 節にある言葉です。そこで不正を働いている裁き人が出てきます。その裁き人を神が裁かれる時に、皮肉を込めて、こう語っています。「82:6-7 わたしは言った。「おまえたちは神々だ。みないと高き者の子らだ。にもかかわらずおまえたちは人のように死に君主たちの一人のように倒れるのだ。」」イエス様が、小さなことから大きなことへ話を移しておられます。神からことばをあずかった者でさえ、神々(エロヒム)と呼ばれているのであれば、父に聖なる者とされて、世に遣わされた者が、神の子と語って、どうして冒瀆なのか？と語られています。

そしてここで興味深いことをイエス様は語られています。「聖書が廃棄されることはありません」ということですね。主は、聖書については必ず成就するもので、破棄されることはないとは度々語られました。「マタ 5:17-18 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。」これは、パリサイ派の人たちも信じていたことで、主ご自身はパリサイ派と同じ聖書観を持っていました。私たちも、同じです。使徒パウロも、テモテ第二 3 章 16 節で、「聖書はすべて神の靈感によって書かれたものだ」と話しています。

37 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に在ることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」39 そこで、彼らは再びイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手から逃れられた。

主は、父のみわざを行っている、そのしるしを見なさい、それを知りなさいと言われていいます。行いの中に、イエス様が父と一つであることが明らかにされてい、だから理解できると言われています。イエス様は、彼らに合わせてくださったのです。ご自身をまだ信じられないのであれば、そのわざをよく見てみなさい、ということです。けれども、ユダヤ人はイエス様を捕えようとします。やはり、「父がわたしにおられ、わたしも父に在る」と言われたところが、冒涇と思ったのです。これによって一つになっていますが、イエス様はかつて弟子たちにも、この方の血を飲み、この方の肉を食べるなら、イエスのうちに私たちがいて、私たちのうちにイエス様がおられる、という話をされました。

イエス様は、これまでと同じように、かろうじて逃げられます。まだ時が来ていないからです。けれども、この時点で、エルサレムから出ていかれてヨルダン川のほうに行かれます。

3B ヨハネ以上の方 40-42

40 そして、イエスは再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された。41 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは「ヨハネは何もしるしを行わなかったが、この方についてヨハネが話したことはすべて真実であった」と言った。42 そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。

バプテスマのヨハネの働きを受けていた人たちが、この地域に多かったようです。そして、彼らもヨハネとイエス様との違いをきちんととらえています。「しるし」がイエス様には伴っています。そのしるしを見れば、この方が父と一つの方なのだ分かるのです。そして、ヨハネもそのように証言していました。だから、信じたのです。

これでお分かりになったでしょうか、イエス様は、エゼキエルが預言した「わたしは自分でわたしの羊の群れを捜し求め、これを捜し出す。」と言った、主ご自身なのだということです。主なる神と一つだということを、生まれつきの盲人の目を開けるしるしなどによって、示されたのです。まだ、「神は信じているが、なぜイエスなのか？」と疑問に思う方は、イエスのなされたわざを見てください。この方が神からの方、神と一つの方であることが分かります。この名にこそ、救いがあります。